平成28年10月4日　中日新聞「医人伝」に掲載されました。

医人伝

認知症 きめ細かくケア

土岐内科クリニック（岐阜県土岐市）

理事長　長谷川（はせがわ）　嘉哉（よしや）さん（50）

認知症の専門医で、クリニックにリハビリセンターを備えるほか、デイサービス施設七カ所、グループホーム二カ所、訪問看護ステーションと介護支援センター各一カ所の計十三施設を岐阜県土岐、多治見両市で運営する。

「医療だけで、認知症患者や家族の困り事を解消することはできない」が信条。多くの認知症患者と向き合い、需要をくみ取り、患者のケアをきめ細かくするには、この態勢が必要と考えた。

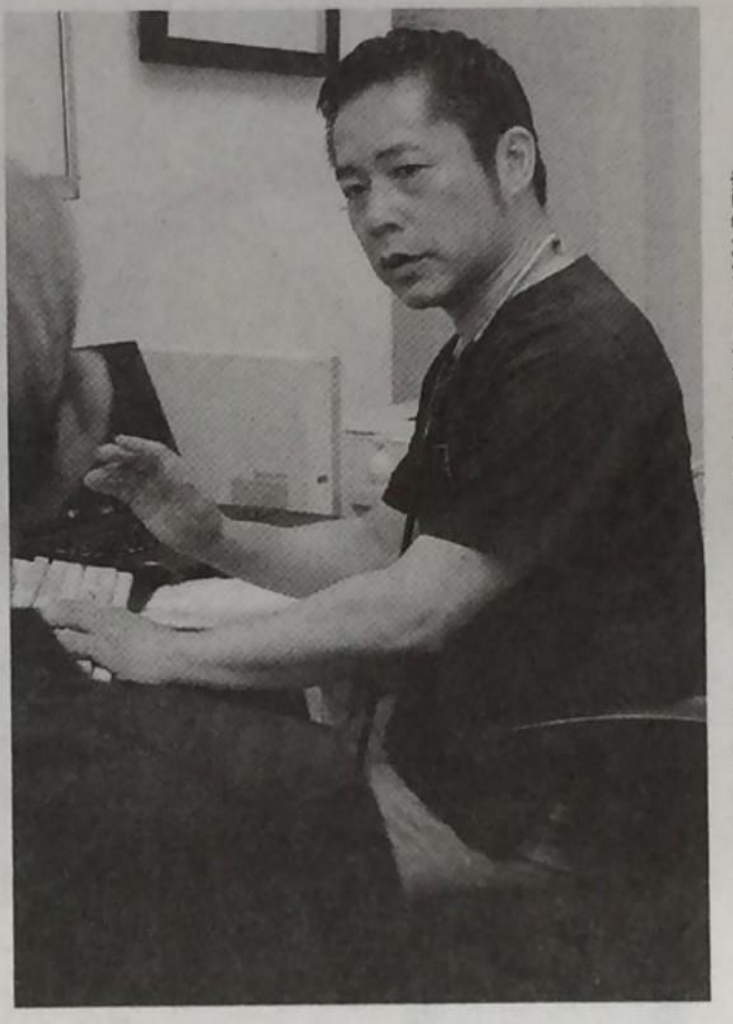
「薬を目の前に置いておいても、忘れてしまうことがあるんです」。診察室で、早期の認知症患者の妻が相談する。「大丈夫。旦那さんにおまかせしていけど、時々は奥さんが確認してあげてね」と声を掛けた。「症状の段階を見極めてあげることが大切」と説明する。

名古屋市名東区出身。医師になったきっかけは、祖母の死を機に小学四年から同居を始めた祖父が、六十代後半で認知症を患ったこと。以前は、よく喫茶店に連れて行ってくれ、知人に「これが俺の孫だ」と自慢げに紹介する祖父だった。しかし、症状が進むと、トイレットペーパーを体に付けたまま風呂に入ったり、食事をしたのに「まだ食べていない」と言い張ったりするように。友達に祖父のことをからかわれ「いないといいのに」と思ったこともあった。

だが、中学三年の時に祖父が亡くなると「何か孫としてできることがあったのではないか」という後悔が芽生えた。名古屋市立大で学び、神経内科の道に進んだ。卒業後は県立多治見病院や名古屋市厚生院に勤務。初期段階の患者から重症で外来診察には来られない患者まで一貫して診ようと、初任地の東濃地域を選んで二〇〇〇年、クリニックを開業した。

医師の立場から祖父の症状を振り返ってみた。「人間の最大のストレスは配偶者の死。引っ越しや退職も大きな原因といわれている。今思えば祖父には一度に複数の要因が降り掛かっていた。今なら症状がどんな段階か、どんな処置が必要か、分かってあげられたのに」。自然と患者を自分の祖父、介護する家族を祖父の面倒を見た母親と思い、接するようになった。

認知症は、早期治療が症状の進行を遅らせるのに有効と考える。「多くの人が気軽に受診し、症状をチェックできる環境を整えたい」（秦野ひなた）



認知症の患者を診察する長谷川嘉哉さん